

“极了” “死了” 一考察

小 川 郁 夫

目 次

1. はじめに
2. 朱德熙1982と刘月华等1983
3. “形容词+极了” “形容词-死了”
4. “動詞+极了” “動詞-死了”
5. “形容词+死我了” “形容词+死人了”
6. “累人” “气人” など
7. “動詞+死+賓語+了”
8. 補語としての扱い
9. おわりに

1. はじめに

次の例文における“极了” “死了” は一般に程度のはなはだしいことを表す補語とされる。

〔1〕 味道好极了。（味が実にいい）

〔2〕 这儿的天气热死了。（この気候は暑くてたまらない）

〔2〕 の“死了” については次のような表現も成立する。

〔3〕 这儿的天气热死我了。（この気候は暑くてたまらない）

〔3〕 ’ 这儿的天气热死人了。（同上）

上の例文〔1〕〔2〕の“极了” “死了” は形容詞の後に置かれているが、“极了” “死了” が動詞の後に置かれることもある。この場合も程度のはなはだしいことを表す。

〔4〕 我气极了。（私は実に腹立たしい）

〔5〕 我气死了。（私は腹立たしくてたまらない）

〔5〕の“死了”については次のような表現も成立する。

〔6〕 真气死我了。（私は本当に腹立たしくてたまらない）

〔6〕’ 真气死人了。（同上）

また，“气死了”は「腹立たしくてたまらない」という怒りの程度を表す場合と，“怒って死んだ，憤死した」という結果を表す場合がある。

本稿では“极了”と“死了”の意味的差異，また〔3〕〔3〕’や〔6〕〔6〕’のような表現に使われる“…死我了”“…死人了”の文法上の問題，またこれらを補語という文法範疇の中でどのように扱うべきかについて考察する。

2. 朱德熙1982と刘月华等1983

朱德熙1982では「程度補語」という項目を設けて次のように述べている¹¹⁾。

形容词之后加上“极、多、透”组成的述补结构都表示程度，例如：好极了 | 暖和多了 | 可笑透了。这一类述补结构之后都带后缀“了”。

动词“死”不带“得”字直接做补语是表示结果的，如“打死、压死、堵死”，但放在形容词之后有时表示程度，例如：冷死了 | 脏死了 | 难看死了。这一类述补结构后头也带后缀“了”。

（形容詞の後に“极、多、透”が加えられて構成される述補構造はすべて程度を表す。例えば“好极了、暖和多了、可笑透了”など。この種の述補構造の後にはすべて接尾辞“了”を伴う。

動詞“死”は“得”を伴わず直接補語となり結果を表す。例えば“打死、压死、堵死”など。しかし形容詞の後に置かれると程度を表すことがある。例えば“冷死了、脏死了、难看死了”など。この種の述補構造の後にも接尾辞“了”を伴う。）

朱德熙1982では，“极了”は形容詞の後に置かれ程度を表し，“死了”は動詞の後に置かれると結果を表すが形容詞の後に置かれると程度を表すとしているが，これは一般的な傾向を述べたものであり，1で述べたように“极了”“死了”が動詞の後に置かれて程度を表す場合もある。次の例文の“极

了” “死了”は動詞の後に置かれて程度を表している。

〔7〕 我感动极了。（私は実に感動した）

〔8〕 我吓死了。（私はびっくりした）

朱德熙1982ではこれら程度を表す“极了” “死了”を「程度補語」と呼んでいる。「程度補語」という文法タームを設定する必要があるかについては本稿の最後で検討する。

刘月华等1983では“极了” “死了”について“多了” “透了”も含めて次のように述べている²¹。

‘极’、‘多’作补语可以用于积极意义，也可以用于消极意义；‘死’、‘坏’作情态补语，多用于消极意义，但也可以用于积极意义。

（“极”と“多”は「〔情態〕補語」となり、積極の意味に使われることもあるし消極的意味に使われることもある。“死”と“坏”は「情態補語」になると消極的意味に使われることが多いが、積極的意味に使われることもある。）

刘月华等1983では“极了” “死了”などの形成する補語を「程度補語」と言わず、「情態補語」と言っているが、このことについても本稿の最後で若干取り上げる。

次の3ではまず“极了” “死了”が動詞の後ではなく形容詞の後に置かれた場合に限定して刘月华等1983の言う「積極的意味」「消極的意味」について検討する。

3. “形容詞+极了” “形容詞+死了”

刘月华等1983の言う「積極的意味」「消極的意味」とは“形容詞+极了” “形容詞+死了”に用いられる形容詞と関係があるのだろうか。

例えば次に挙げる形容詞は一般に好ましい意味を持つものである。

好、香、好吃、好闻、好听、美、美丽、漂亮、好玩儿、高兴、痛快、乐
これらの形容詞の後には“极了” “死了”ともに置くことができる。しかし“好”から“好玩儿”までの形容詞の後には“死了”よりも“极了”が多用される。例えば“好死了”よりも“好极了”が多用されるが、しかし“好死了”も文法的に成立する。またどちらも“好”という形容詞の程度がはな

はだしいことを表す。

しかし、上に挙げた形容詞のうち最後の“高兴”³⁾“痛快”“乐”の3つに関しては“高兴极了”“高兴死了”“痛快极了”“痛快死了”“乐极了”“乐死了”すべてよく用いられる。

“高兴极了”と“高兴死了”を比べた場合，“高兴极了”はやや客観的に「実にうれしい」と言っているが，“高兴死了”は「うれしくてたまらない」というような感情的色彩の濃い表現である。“痛快极了”と“痛快死了”，“乐极了”と“乐死了”についても同様のことが言える。上に挙げた形容詞で“高兴”“痛快”“乐”は人の感情そのものを表す形容詞である。しかしそれ以外のものは直接感情を表さないため“死了”よりも“极了”が多く伴われると考えられる⁴⁾。

次に挙げる形容詞は一般に好ましくない意味を持つものである。

坏、脏、臭、难吃、难闻、难听、丑、难看、难过、难受、糟糕

上に挙げた形容詞はすべて後に“极了”“死了”を伴い程度のはなはだしいことを表す。好ましい意味を持つ形容詞の場合は“死了”よりも“极了”が多用されることについては上で述べたが、好ましくない意味を持つこれらの形容詞の後には“极了”“死了”ともによく使われる。

例えば“坏极了”“脏极了”はやや客観的に「実に悪い」「実に汚い」ことを述べているが，“坏死了”“脏死了”は感情的な嫌悪を表す。もちろん好ましくない形容詞の性質上“坏极了”“脏极了”にも嫌悪は現われるが，“坏死了”“脏死了”の方が感情的色彩の濃い表現である。

刘月华等1983では“极了”は「積極的意味」に使われることもあるし「消極的意味」に使われることもあると述べているが、それは“极了”が好ましい形容詞の後にも用いられるし、好ましくない形容詞の後にも用いられることを指しているように思われる。刘月华等1983では，“死了”の多くは「消極的意味」に使われるとも述べているが、これは“死了”が好ましくない形容詞の後に使われ嫌悪感を表すことを指すようである。さらに刘月华等1983では，“死了”は「積極的意味」に使われることもあると述べているが、それは“高兴死了”“痛快死了”“乐死了”などを指すように思われる。刘月华等1983によれば結局“极了”“死了”ともに「積極的意味」「消極的意味」の両方に用いられることになり、その説明はやや曖昧なものとなっている。“极了”は客観的，“死了”は感情的ととらえた方がすっきりするように思

われる。

事実“死了”は感情に無関係な、ものの形状や性質を表す形容詞の後には用いられない。次に挙げる形容詞は一般に後に“极了”を伴うことはできるが、“死了”を伴うことはできない。

大、高、长、远、厚、深、多、亮、准、对、方便、聪明、傻、老实

上で好ましい意味を持つ形容詞として挙げた“好”“香”“好吃”“好闻”“好听”“美”“美丽”“漂亮”“好玩儿”は直接感情を表さないが人の感情に訴え得る形容詞である。従って一般には“极了”を伴うが、“死了”を伴うことも可能なのである。

4. “動詞+极了” “動詞+死了”

“极了”“死了”は動詞の後に置かれることもある。例えば次のような動詞である。

感动、喜欢、佩服、气、害怕、着急、急、后悔、羞、担心、伤心、想念、想、讨厌、恨、羡慕、嫉妒

これらの動詞はすべて心理活動を表すものである。“极了”“死了”は程度のはなはだしいことを表すが、これらの動詞のほとんどが“很”“非常”などの程度を表す副詞の修飾を受けることができる。

“极了”“死了”を伴った場合の意味的差異については“形容詞+极了”“形容詞+死了”の場合と同様であると考えられる。

〔9〕 我感动极了。（私は実に感動している）

〔10〕 我感动死了。（私は心から感動している）

〔11〕 我气极了。（私は実に腹立たしい）

〔12〕 我气死了。（私は腹立たしくてたまらない）

“极了”を伴った〔9〕〔11〕はやや客観的に心情を述べたものであるが、“死了”を伴った〔10〕〔12〕は心の底からの心情を吐露したものである。もちろん上に挙げた動詞は心理活動を表すものなのでそれ自体が感情を表してはいるが、“极了”“死了”を伴った時の意味的差異としてこのようなことが言えると思われる。

5. “形容詞－死我了” “形容詞－死人了”

“累”ももちろん後に“极了”“死了”を伴いその程度がはなはだしいことを表す。

〔13〕 我累极了。（私はひどく疲れている）

〔14〕 我累死了。（私はへとへとだ）

上の例文はどちらも「私はひどく疲れている」という意味であるが、〔13〕の“累极了”はやや客観的に述べたもので、〔14〕の“累死了”は「へとへとに疲れてたまらない」のように感情的色彩の濃い表現である。

このうち〔14〕の“累死了”に関しては次のような表現も可能である。

〔15〕 真累死我了。（私は本当にへとへとだ）

〔15〕’ 真累死人了。（同上）

これらに用いられた“我”“人”は何であろうか。またこれらの表現を文法的にどのように扱ったらよいのであろうか。

〔15〕〔15〕’は介詞“把”を用いて次のような表現に変えてもその表す意味内容はほとんど同じである。

〔16〕 真把我累死了。（私は本当にへとへとだ）

〔16〕’ 真把人累死了。（同上）

介詞“把”は賓語を述語の前部に引き出す機能を持つ。“把”のこの基本的機能から考えると〔15〕の“我”，〔15〕’の“人”は“累死”の賓語であると見なすのが妥当である。すると〔15〕〔15〕’の“累死”は「ひどく疲れている」という意味ではなく、「誰々をひどく疲れさせる」という他動詞的機能と使役的意味を持つと考えざるを得なくなる。次のような表現も可能である。

〔17〕 这个工作真累死我了。（この仕事のために私はへとへとだ）

〔17〕’ 这个工作真累死人了。（同上）

〔17〕〔17〕’は用いられている語〔句〕の機能と意味に忠実に従って直訳すれば「この仕事は私（人）をひどく疲れさせる」とでもなるだろうか。

なおこれらに用いられている“人”は「他人」を指しているのではなく、「自分自身」を指している。つまり“我”と同じものを指している。

また“累人”という語も存在する。

〔18〕 这个孩子真累人。（この子は本当に面倒な子だ）

〔19〕 工作太多，真累人。（仕事が多すぎて本当に疲れる）

〔18〕〔19〕の“累人”は1語の形容詞とも考えられるが、「人を疲れさせる」という意味で“累”自体は他動詞的機能と使役の意味を持っている。とすると〔17〕’の“累死人了”は“累人”という離合詞に補語“死”が入り、文末に“了”を伴ったものと考えることができる。そして〔17〕の“累死我了”は“人”の代わりに“人”と同一のものを指す“我”が用いられた類似表現と考えられる⁵¹。

“困”についても“累”の場合と同様のことが言える。“困”もやはり後に“极了”“死了”を伴って「ひどく眠い」という意味を表す。

〔20〕 我困极了。（私は実に眠い）

〔21〕 我困死了。（私は眠くてたまらない）

〔20〕の“困极了”はやや客観的，〔21〕の“困死了”は感情的色彩が濃い。

このうち〔21〕の“困死了”に関しては次のような表現も可能である。

〔22〕 真困死我了。（私は本当に眠くてたまらない）

〔22〕’ 真困死人了。（同上）

また次のような表現も可能であることから，〔22〕の“我”と〔22〕’の“人”は“困死”の賓語であると考えられる。

〔23〕 真把我困死了。（私は本当に眠くてたまらない）

〔23〕’ 真把人困死了。（同上）

“困”は形容詞である⁵²が，〔22〕～〔23〕’の“困死”は「ひどく眠い」という意味ではなく，「誰々をひどく眠くさせる」という他動詞的機能と使役の意味を持っていると思われる。

また“困人”という語も存在する。

〔24〕 房间里太暖和，真困人。（部屋の中が暖かすぎて，本当に眠くなる）

“困人”は“累人”と同様に1語の形容詞とも考えられるが，「人を眠くさせる」という意味で，“困”は他動詞的機能と使役の意味を持っている。すると〔22〕’の“困死人了”は“困死”という離合詞に補語“死”が入り、文末に“了”を伴ったものと考えることができる。そして〔22〕の“困死我了”は“人”の代わりに“人”と同一のものを指す“我”が用いられた類似

表現と考えられる。

「私（人）を疲れさせる」や「私（人）を眠くさせる」という日本語はあまり口語的な表現とは言えないが、中国語の“累死我了”“累死人了”“困死我了”“困死人了”は日常よく使う極めて口語的な表現である。ここでもやはり“死”が感情に訴える表現に用いられることが作用しているように思われる。

上では“累人”“困人”という語を挙げて“累”“困”に他動詞的機能と使役の意味があることを述べたが、実はかなり多くの形容詞がこのような機能を持っている。

[25] 我忙死了。（私は忙しくてたまらない）

[26] 这儿的天气热死了。（ここの気候は暑くてたまらない）

[27] 这个菜辣死了。（この料理は辛くてたまらない）

[28] 行李沉死了。（荷物が重くてたまらない）

上の例文における“忙”“热”“辣”“沉”は形容詞である。また“*忙人”⁷⁾“*热人”“*辣人”“*沉人”などという語も存在しない。しかしここに挙げた例文は次のような形に書き換えることが可能である⁸⁾。

[29] 这件事忙死我了。（この事で私は忙しくてたまらない）

[29]’ 这件事忙死人了。（同上）

[30] 这儿的天气热死我了。（ここの気候は[私には]暑くてたまらない）

[30]’ 这儿的天气热死人了。（同上）

[31] 这个菜辣死我了。（この料理は[私には]辛くてたまらない）

[31]’ 这个菜辣死人了。（同上）

[32] 行李沉死我了。（荷物が[私には]重くてたまらない）

[32]’ 行李沉死人了。（同上）

これらの“忙”“热”“辣”“沉”は「誰々を忙しくさせる」「誰々を暑くさせる」「誰々を辛くさせる」「誰々を重くさせる」という他動詞的機能と使役の意味を持っていると考えざるを得ない。「暑くさせる」「辛くさせる」「重くさせる」と言っても“我”や“人”が実際に暑くなったり、辛くなったり、重くなったりはしないので、「暑く感じさせる」「辛く感じさせる」「重く感じさせる」という意味であろう。“忙”も「忙しく感じさせる」という意味であろう。同様に上で述べた“累”“困”も「疲れを感じさせる」

「眠く感じさせる」という意味である。

こう考えると“形容詞－死了”が感情に訴える表現であることが関係してくるように思われる。“形容詞－死”のあるものは「人に形容詞で表されている状態や性質を感じさせる」という機能を持っていると考えられる。

“形容詞－死了”が訴える感情には広く人の感覚も含まれる。上の〔25〕～〔32〕’の例文は人の感覚に訴えるものである。

ではどのような形容詞が“死”を伴ってそのような機能を持ち得るのであろうか。

実は3で挙げた感情や感覚に訴え得る形容詞、特に好ましくない意味を持つ形容詞の多くのもがこの“形容詞＋死我了”“形容詞＋死人了”という形を形成する。

〔33〕 这件事高兴死我了。（この事で私はうれしくてたまらない）

〔33〕’ 这件事高兴死人了。（同上）

〔34〕 这个地方脏死我了。（ここは汚くてたまらない）

〔34〕’ 这个地方脏死人了。（同上）

〔35〕 那个水沟臭死我了。（あの溝は臭くてたまらない）

〔35〕’ 那个水沟臭死人了。（同上）

〔36〕 那些臭鱼难闻死我了。（あれらの腐った魚は臭くてたまらない）

〔36〕’ 那些臭鱼难闻死人了。（同上）

〔37〕 他唱的歌难听死我了。（彼の歌う歌は耳障りでたまらない）

〔37〕’ 他唱的歌难听死人了。（同上）

〔38〕 他长得丑死我了。（彼の容貌は醜くてたまらない）

〔38〕’ 他长得丑死人了。（同上）

〔39〕 他长得难看死我了。（同上）

〔39〕’ 他长得难看死人了。（同上）

〔40〕 听到这件事，难过死我了。（この事を聞いて、私はつらくてたまらない）

〔40〕’ 听到这件事，难过死人了。（同上）

〔41〕 听到这件事，难受死我了。（同上）

〔41〕’ 听到这件事，难受死人了。（同上）

“形容詞＋死＋賓語＋了”は人の感情や感覚に訴える表現であるが、感情や感覚はその主体である自分自身が最もはっきりと自覚できる。既に述べた

ことであるが“形容詞－死人了”の“人”は他人を指すのではなく、話し手である“我”を指している。“形容詞＋死＋賓語－了”に用いられる賓語は“我”または“人”だけであり、“*形容詞＋死你了”“*形容詞＋死他了”は一般に成立しない⁹⁾。

[42] * 这件事忙死你了。

[43] * 这儿的天气热死他了。

6. “累人” “气人” など

5で“累人” “困人” という語を挙げた。このような語には他に次のようなものがある。

气人、吓人、急人、笑人、烦人、难人

これらはすべて「人を…させる」という意味で，“人”の前の部分すなわち“气” “吓” “急” “笑” “烦” “难”などは他動詞的機能と使役的意味を持っている。

これらはすべて次のような表現を形作ることが可能である。

[44] 你气死人了。（あなたには本当に腹が立つ）

[45] 这件事吓死人了。（この事には本当にびっくりした）

[46] 这件事急死人了。（この事にはいらいらさせられる）

[47] 那个话剧笑死人了。（あの劇はおかしくてたまらない）

[48] 这件事烦死人了。（この事は煩わしくてたまらない）

[49] 这个问题难死人了。（この問題は難しくてたまらない）

上の [44] ～ [49] の“人”はすべて“我”に置き換え可能である。また置き換えても意味内容はほとんど変わらない。

[44] ’ 你气死我了。（ [44] に同じ）

[45] ’ 这件事吓死我了。（ [45] に同じ）

[46] ’ 这件事急死我了。（ [46] に同じ）

[47] ’ 那个话剧笑死我了。（ [47] に同じ）

[48] ’ 这件事烦死我了。（ [48] に同じ）

[49] ’ 这个问题难死我了。（ [49] に同じ）

5で“形容詞＋死＋賓語＋了”に用いられる賓語は“我”もしくは“人”

だけであり、“*形容詞－死你了” “*形容詞－死他了”は一般に成立しないと述べたが、ここに挙げた“气”“吓”“急”“笑”“烦”“难”及び5に挙げた“累”“困”は“死”を伴った後に“我”と“人”以外の賓語を取ることができる¹⁰⁾。

- 〔50〕 你气死他了。（あなたは彼をひどく怒らせた）
- 〔51〕 这件事吓死你了吧？（この事にあなたはびっくりしたでしょう）
- 〔52〕 这件事急死妈妈了。（この事に母はいらいらした）
- 〔53〕 那个话剧笑死你了吧？（あの劇はひどくおもしろかったでしょう）
- 〔54〕 这件事烦死爸爸了。（この事は父をひどく煩わせた）
- 〔55〕 这个问题难死他了。（この問題は彼をひどく困らせた）
- 〔56〕 这件事累死老师了。（この事で先生は疲れはててしまった）
- 〔57〕 房间里太暖和。困死你了吧？（部屋の中が暖かすぎて眠くなつたでしょう）

上の例文における“气”“吓”“急”“笑”“烦”“难”“累”“困”は他動詞的機能と使役の意味を持っている。筆者は“累”“困”は形容詞と考えるが、“气”“吓”“急”“笑”“烦”は動詞である。“难”は「難しい」という意味の用法の他に「困らせる」という動詞としての用法も持つ。〔55〕と次の文とは意味的差異がほとんどない。

〔55〕’ 这个问题难住他了。（この問題は彼をほとんど困らせた）

〔55〕’の“难”は動詞であり、動詞“难”に結果補語“住”が付いたものである。“動詞＋結果補語”はその後に賓語を取ることがあり、その賓語には文法的制約はない。論理的に可能であれば様々な賓語を取ることができる。

5で“形容詞＋死人了”の“人”は“我”を指すと述べたが、上に挙げた“气人”“累人”などの“人”は場合によっては一般的な人をも指し得るのではないだろうか。だからこそ“气人”“累人”などが形容詞性の高い1語として単独で使用可能なのであろう。

“气”“吓”“急”“笑”“烦”“难”“累”“困”は他動詞的機能と使役の意味が強い。次の7では他動詞ではあるが、使役の意味が強いとは思われない動詞と“死了”の関係について見ていく。

7. “動詞－死－賓語－了”

4で“极了”“死了”を伴うことができる動詞として次のようなものを挙げた。これらの動詞はすべて心理活動を表すものである。

感动、喜欢、佩服、气、害怕、着急、急、后悔、羞、担心、伤心、想念、想、讨厌、恨、羡慕、嫉妒

これらの動詞のうちいくつかは人を表す賓語を取ることができる。

〔58〕 我喜欢你。（私はあなたが好きだ）

〔59〕 我佩服李老师。（私は李先生を敬服している）

〔60〕 我担心他。（私は彼のことが心配だ）

〔61〕 我想孩子。（私は子供が恋しい）

〔62〕 我讨厌他。（私は彼が嫌いだ）

〔63〕 我恨她。（私は彼女を恨んでいる）

これらは動詞の後に“死”を伴って次のような表現を形成することもできる。文末には“了”が必要である。

〔58〕’ 我喜欢死你了。（私はあなたのことが好きでたまらない）

〔59〕’ 我佩服死李老师了。（私は心から李先生を敬服している）

〔60〕’ 我担心死他了。（私は彼のことが心配でたまらない）

〔61〕’ 我想死孩子了。（私は子供が恋しくてたまらない）

〔62〕’ 我讨厌死他了。（私は彼が大嫌いだ）

〔63〕’ 我恨死她了。（私は彼女を心から恨んでいる）

上の例文〔58〕’～〔63〕’における賓語は“動詞＋死”の受け手であり、“你”“他”“李老师”“孩子”等様々なものが賓語となることができる。

6で述べた“形容詞＋死＋賓語＋了”の賓語は“我”または“人”に限られる。“人”も“我”を指しているから、結局“形容詞＋死＋賓語＋了”の賓語は一人称に限られるということになる。“形容詞＋死我了”“形容詞＋死人了”の“形容詞＋死”は使役の意味を持っていた。

また“气”“吓”“急”“笑”“烦”“难”などの動詞が“死”を伴い、その後一人称の賓語を取って使役の意味に使われることについても6で述べた。

では上に挙げたような“動詞＋死”には一人称の賓語を取って使役の意味を表す用法はないのであろうか。結論から言えば“動詞＋死”にもこのよう

な用法はある。すると次のような例文はすべて両義性を持つことになる。

- [64] 你喜欢死我了。
(あなたは私が大好きだ)
(あなたは私を好きにさせる→私はあなたが大好きだ)
- [65] 你佩服死我了。
(あなたは私を敬服している)
(あなたは私に敬服させる→私はあなたを敬服している)
- [66] 你担心死我了。
(あなたは私のことを心配している)
(あなたは私に心配させる→私はあなたが心配だ)
- [67] 你想死我了。
(あなたは私が恋しい)
(あなたは私に恋しくさせる→私はあなたが恋しい)
- [68] 你讨厌死我了。
(あなたは私を嫌っている)
(あなたは私に嫌わせる→私はあなたを嫌っている)
- [69] 你恨死我了。
(あなたは私を恨んでいる)
(あなたは私に恨ませる→私はあなたを恨んでいる)

上に挙げた例文は2番目の意味の場合すべて“我”を“人”に置き換えることができる。

- [64] '你喜欢死人了。(私はあなたが大好きだ)
- [65] '你佩服死人了。(あなたには本当に敬服する)
- [66] '你担心死人了。(あなたには本当に心配させられる)
- [67] '你想死人了。(本当にあなたが恋しい)
- [68] '你讨厌死人了。(あなたは本当にいやらしい)
- [69] '你恨死人了。(あなたは本当に憎らしい)

[64] '～[69] 'は両義性を持たない。また“我”を“人”に置き換えたが、「好きだ」「敬服する」「心配する」などの感情の主体はやはり「私自身」である。

また例文[64]～[69]の2番目の意味の場合は“你”と“我”を入れ替えても表す意味内容に変化はない。

(I)

你喜欢死我了。=我喜欢死你了。

你佩服死我了。=我佩服死你了。

你担心死我了。=我担心死你了。

你想死我了。=我想死你了。

你讨厌死我了。=我讨厌死你了。

你恨死我了。=我恨死你了。

(II)

上に挙げた動詞はすべて心理活動を表す。(II)の“我”は心理活動の主体としての主語である。「私自身」が“你”を好きであったり、敬服したり、心配したりするのである。しかし(I)の“你”は心理活動の主体ではない。“你”が“我”に〔あなたを〕好きにさせたり、〔あなたを〕敬服させたり、〔あなたのことを〕心配させたりするのである。“喜欢死了”“佩服死了”“担心死了”という心理活動の主体はあくまでも“我”である。

(I)の主語がたまたま人称代名詞“你”だけなので理解しにくいものとなっているが、“你”の代わりに次のような語句を置くと、(I)は両義性を持たなくなり(II)で表されている意味内容だけを持つようになる。

〔70〕你真帅。喜欢死我了。(あなたは本当にすてきだ、大好きです)

〔71〕你的汉语水平佩服死我了。(あなたの中国語のレベルには心から敬服する)

〔72〕你干这种事。真担心死我了。(あなたはこんな事をして、私は本当に心配でたまらない)

〔73〕你一个月没回来。真想死我了。(あなたは1ヶ月帰って来なかった、私は本当に恋しかった)

〔74〕你老撒谎。真讨厌死我了。(あなたは嘘ばかりついて、本当にいやらしい)

〔75〕你总是不听话。恨死我了。(あなたはいつも言うことを聞かない、本当に憎らしい)

〔70〕～〔75〕の例文の前半部分は後半部分の原因となっているので、後半部分は両義性を持ちにくい。これらの“我”はもちろん“人”に置き換え可能である。

上に挙げた動詞“喜欢”“佩服”“担心”“想”“讨厌”“恨”は後に賓語“我”を取ることができ、その場合「私を好きだ」「私を敬服する」「私

のことを心配する」などの意味を表す。これが“動詞＋賓語”の最も基本的な解釈である。しかし動詞が“死”を伴った後にさらに“我”が置かれると以上で述べたような両義性を生ずるのである。

このような動詞としては他に“羨慕”“嫉妒”があるが、次のように前半部分に原因を表す語句を置けば、両義性を持たない。

〔76〕 他考了第一名。羡慕死我了。（彼は試験で1番になった、羨ましくてたまらない）

〔77〕 他总是比我考得好。嫉妒死我了。（彼の成績はいつも私よりいい、ねたましくてたまらない）

〔76〕〔77〕の“我”は“人”に置き換え可能である。

また「誰々を…する」という意味で人を表す賓語を取らない動詞“感动”“羞”¹¹⁾“后悔”“伤心”¹²⁾が“死”を伴い、その後さらに人称代名詞“我”が置かれた次の文は両義性を持たない。

〔78〕 那个电影感动死我了。（あの映画は本当に感動的だ）

〔79〕 那件事羞死我了。（あの事を私は心から恥ずかしく思う）

〔80〕 这件事真后悔死我了。（この事を私は本当に後悔している）

〔81〕 你干的那件事真伤心死我了。（あなたがやったあの事で私は本当に心を痛めている）

〔78〕～〔81〕の“我”も“人”に置き換え可能である。

これらの“動詞＋死＋賓語＋了”の“賓語”には一般に“我”か“人”しか用いられない。“人”も“我”を指していることは既に述べた。王希杰1992ではこの点に触れて、心理活動の程度は主体（自分自身）が一番はっきりと知っているという旨のことが述べられている。“動詞＋死了”は感情や感覚に強く訴える表現であることから考えても、一番訴えやすいのは自分自身の感情や感覚ということであろう。このことは“形容詞＋死＋賓語＋了”の場合についても言える。

8. 補語としての扱い

今まで扱ってきた“動詞＋死”“形容詞＋死”は程度を表すものであるが、これらが程度ではなく結果を表すこともある。

〔82〕 累死了。

〔83〕 热死了。

〔82〕の“累死了”は「ひどく疲れている」という意味を表すこともあるが、「疲れて死んだ」という意味を表すこともある。同様に〔83〕の“热死了”も「ひどく暑い」という意味と「暑さのため死んだ」という両義性を持っている。

問題は程度を表しているか、それとも結果を表しているかという意味に基づいて文法的に「程度補語」であるとか、結果補語であると分類する必要があるかということである。

筆者は今のところ補語は結果補語、方向補語、状態補語、可能補語の4つに大別すればよく、「程度補語」という文法タームを設定する必要はないと考えている。結果補語、方向補語、状態補語、可能補語の4つが文法形式上の明確な違いを有しているからである。

文法形式から見ると“…死了”は結果補語を含んだ表現であると考えられる。この結果補語が場合によって程度を表すと考えるのである。

2で挙げたように、朱德熙1982では“极了”“死了”の他に“多了”“透了”も「程度補語」としている。筆者はこれらも結果補語として扱えばよいと考える。

例えば“暖和多了”は“暖和得多”としても意味内容はほとんど変わらずどちらも程度を表している。しかし文法形式は大きく異なる。これらの“多了”“得多”をともに「程度補語」とするのは完全に意味に基づいた分類である。“暖和多了”は結果補語，“暖和得多”は状態補語とする方が適当であるように思われる。ただし意味としてはどちらも程度を表している。

“透了”の場合は、例えば“看透了”“淋透了”は誰もが認める結果補語であるが、“坏透了”“可笑透了”の場合は程度を表すという“…死了”の場合と同様の問題が発生する。“透了”も結果補語として扱い、場合によっては程度を表すとした方がすっきりするように思われる。

また筆者は“…极了”も結果補語を含んだ表現で、“极”と“了”は2語であると考えている。日本で発行されている辞典の多くのものが“极了”を1語の副詞として収録している。しかし《現代汉语词典修订本》や《汉语拼音词汇》に“极了”は収録されていない¹³⁾。また鲁迅の《故乡》には次のような文がある¹⁴⁾。

“这好极了！他。——怎样？……”

もちろん現代中国語では“…极了”の後には必ず“了”を伴うが、だからと言って“极了”が1語という理由にはならない。“极”はもともと「極まる」という意味であって、例えば“好极了”は“好”という状態が極まるという結果を表していると考えられる。他の結果補語と同様の構造であると考えるのがよいと思われる。

听懂了 → 听懂/了

好极了 → 好极/了

* 好极了 → 好/极了

“…死了”は“热死我了”のように“死”と“我”の間に他の成分が入り込むことがあるからか、“死了”で1語としている辞典はない。“…死了”は文法形式としては「その結果死ぬ」という結果補語である。程度を表す場合でも構造的には次のようにとらえるのが妥当であろう。

热死了 → 热死/了

また、刘月华等1983では一般に状態補語と呼ばれているものを「情態補語」と呼び、“极”“死”等の程度を表す補語も「情態補語」に含めている。刘月华等1983では「程度補語」という文法タームは設定していないが、“死”を「情態補語」に入れると次のような文の分析はやはり完全に意味に基づいて行われることになり¹⁵⁾、“累死了”“热死了”を意味によって結果補語と「程度補語」に分けることと同じような結果になってしまう。

这盆花干死了。 (结果补语)

这件事真把人急死了。 (情态补语)

上の刘月华等1983の例文2つも含め、“极了”“死了”はやはり結果補語として扱うのが妥当であると思われる。

9. おわりに

本稿を作成するにあたって筆者ははじめ“极了”と“死了”がどのような形容詞に付きやすいかを調査しようと考えた。しかし中国人に対して口頭調査を始めてすぐにこの問題が極めて難しいものであることが分かった。“极了”については余り問題はなかったが、“死了”が付くか付かないかについ

て、中国人が判断に苦しむ場合が非常に多いのである。

例えば「重い」という意味の形容詞として“沉”と“重”があるが、“沉极了”“沉死了”“重极了”は成立するが、“重死了”は不自然だとする中国人がかなりいた。さらに“沉死我了”は成立するが、“*重死我了”は不成立である。このことは“沉”が“重”よりも口語的であることが関係していると思われる。

また「恋しく思う」という意味の動詞“想”と“想念”についても同様のことが言える。“想死我了”は使用頻度の高い表現であるが、“*想念死我了”は一般に不成立である。“想”の方が“想念”より口語的であるためであろうか。

本稿では“极了”は客観的、“死了”は感情的と述べたが、“死了”の特徴としてもうひとつ口語的という点を挙げることができる。口語的に感情や感覚を述べるのに最も適した人物は話し手自身である。“形容詞+死+賓語+了”や“動詞-死-賓語+了”の賓語が一般に“我”または“人”に限られるゆえんである。

また中国人に対する調査から、“极了”を伴い得る形容詞の数は“死了”のそれよりも圧倒的に多いことも分かった。本稿作成のために合計470個余りの形容詞¹⁶⁾について“极了”と“死了”の付加の可能性について調査したが、“极了”の付加可能なもの約280個に対して、“死了”が問題なく付加可能なものは70個余りであった。“死了”が付加可能な形容詞の数がこのように少ないのは、“死了”は感情や感覚に訴え、さらにより口語的な形容詞にのみ付くという制約があるためと考えられる。

注1) 137頁。

2) 375頁。

3) 『現代中国語辞典』『中国語大辞典』のように“高兴”を動詞とする辞典もあるが、ここでは形容詞として扱う。

4) 例えば好ましい意味を持つ形容詞として最初に挙げた“好”については次のようなことが言える。ある物に対して“好极了”と言うと客観的に「実にいい」という意味を表すが、“好死了”と言うとその物に対して非常に満足しているとか、好きでたまらないというような含意

を持つ。また“他们俩好死了”（彼らはとても仲がいい）と言え彼らはどうしてそんなに仲がいいのか理解できないとか、彼らの関係に文句をつけたいなどの含意を持つ。また、複数の中国人インフォーマントによれば“他健康死了”も成立し、「死んでほしいほど彼を憎んでいるが、彼は死にそうにないほど健康だ」という含意を持つという。これも“死了”が感情的色彩の濃い表現であるためと考えられる。

- 5) 『標準中国語辞典第2版』『岩波中国語辞典』『現代中国語辞典』及び『中国語大辞典』の“累”についての品詞及び意味の記述を比較してみる。

『標準中国語辞典第2版』

形容詞 疲れている。

動詞 面倒をかける、苦勞をかける。

『岩波中国語辞典』

動詞 疲れる。

形容詞 疲れている。

動詞 骨を折る、苦勞をかける。

名詞 骨折り、苦勞。

『現代中国語辞典』

動詞 疲れる、過勞になる。

動詞 疲れさす、苦勞をかける。

『中国語大辞典』

動詞 疲れる、過勞になる。

動詞 疲れさす、疲れさせる、苦勞をかける。

動詞 気苦勞する。

中国語の品詞分類は極めて難しい問題の1つであるが、上に挙げた辞典の記述からもそのことがうかがえる。筆者は“我很累”“我累了”“我累极了”“我累死了”の“累”は形容詞であると思うが、『現代中国語辞典』と『中国語大辞典』では動詞としての品詞名しか挙げていない。ただ“累人”という語の“累”が他動詞的機能と使役の意味を持っていることは確かであろう。また“累人”の品詞について『岩波中国語辞典』『現代中国語辞典』『中国語大辞典』では動詞と形容詞の両品詞名を挙げている。

- 6) “困”に関しては注5に挙げた4辞典とも形容詞としている。
- 7) 「忙しい人」という意味の“忙人”は存在する。なお*は例文や例語、及び分析が成立しないことを表す。
- 8) “把”を用いた“这件事把我忙死了”“这件事把人忙死了”なども成立する。“把”を用いた表現については“把”構文全体の中でとらえる必要があると思われるので、本稿では扱わず今後の研究課題とする。
- 9) 本稿を作成するに当たって多数の中国人に対して調査を行った。彼らが判断に苦しむ場合が多々あり、この問題の複雑さを知らされたが、本稿では一般的に容認可能と思われるものを扱うことにする。“*形容詞+死你了”“*形容詞+死他了”についてある中国人インフォーマントは例えば“辣死你了吧?”“你看,辣死他了!”を可能としたが、一般的にはやはり不成立と考えた方がよさそうである。
- 10) しかし多くの中国人が“困死他了”を不自然だとした。“困”は形容詞性が高いからであろうか。また“笑死他了”を不自然だとした中国人も多い。しかし“把他笑死了”は成立する。“把”構文全体の中で再検討する必要がある。ここに挙げた“…死”の賓語として最も安定的なのはやはり“我”と“人”である。
- 11) “感动”は賓語“人”を取って例えば“那个电影太感动人了”(あの映画は非常に感動的だ)のように言うことができる。この場合の“感动人”は「人を感動させる」という意味である。《現代汉语词典修订本》には“感动”の意味の1つとして“使感动”が挙げられている。また“羞”も後に“人”を取って“羞人”と言うことができるが、これは6で取り上げた“累人”“气人”と同様のものである。
- 12) 王希杰1992には“我后悔死你了”“我伤心死你了”という例文が挙げられているが、筆者にはこの文の意味が理解できない。
- 13) 《現代汉语词典》にも収録されていない。
- 14) この指摘は《現代汉语虚词例释》256頁にもある。同書では、“了”を伴わない“好极”はやや文語的な言い方であると述べている。『岩波中国語辞典』には“好极”が1語の形容詞として収録されているが、「ただし“好极,好极”と連用されるのが普通である」という注意書きがある。“好极”を1語とすることにはかなり抵抗を覚えるが、現代中国語では“好极”だけではやはり安定を欠くようである。

15) 375頁。

16) 上野恵司編『分類中国語基本単語3800』に挙げられている形容詞に若干の形容詞を加えたものを使用した。

引用文献

朱德熙1982《语法讲义》，商务印书馆。

刘月华、潘文娉、故骅1983《实用现代汉语语法》，外语教学与研究出版社。

王希杰1992〈“想”类动词的句法多义性〉，《汉语学习》1992. 2。

《现代汉语词典修订本》，商务印书馆，1996。

《汉语拼音词汇》（1989年重编本），语文出版社，1991。

香坂順一1982，《現代中国語辞典》，光生館。

『中国語大辞典』，角川書店，1994。

上野恵司1996，《標準中国語辞典第2版》，白帝社。

倉石武四郎1963，《岩波中国語辞典》，岩波書店。

《现代汉语词典》，商务印书馆，1978。

《现代汉语虚词例释》，北京大学中文系1955・1957级语言班编，商务印书馆，1982。

上野恵司1989，《分類中国語基本単語3800》，白帝社。